

農民・ボランティア・専門家の協働で 福島・飯舘村 放射線汚染から生活と産業の再生へ

福島県飯舘村——阿武隈山系に位置する人口6,000人余りの村。地震・津波による人的被害はほとんどなく、原発周辺からの避難者を受け入れていた。2011年3月15日午後の放射性プルームに被われ、夜に降った雨や雪で濃度の高い放射性物質が地上に拡散。1カ月後の4月11日、計画的避難地区となり、全村避難を迫られることになった。原発事故によって破壊されてしまった飯舘村で、「生活と産業の再生を目指す」特定非営利活動法人ふくしま再生の会が活動を行っている。7月13日～14日の2日間、土壌放射線量のサンプル採取に参加して取材した。

「この一帯は憲法違反で、民主主義が機能していない所です」と、ふくしま再生の会の田尾陽一理事長は冗談っぽく皮肉りながら、飯舘村の現状を話す。憲法違反というのは、第25条の健康的で文化的な最低限度の生活の権利が保障されていないことであり、民主主義が機能しないというのは、住民の声が反映されていない現実を指摘している。

福島事務所として自宅を提供する菅野宗夫福島事務所代表は、「この場所に中央省庁の役人は来ていない。見て、聞かずに被ばくの現状がわかるのでしょうか」と怒りを含めたように指摘する。また、田尾理事長は「そういう意味で、原発に関する政府、政治家、官僚、東電等企業、マスコミ、知識人がメルトダウンしてしまっている。だから、被災地域で生活と産業の再生を目指す村民と専門家、ボランティアの協働組織を立ち上げたのです」と語る。

原発事故で飛散した放射能は福島県内を広く襲い、汚染した。そのために2012年早々に環境省は除染ロードマップを提示した。除染のキーワードは、「地表から5cmの深さにセシウムは留まり、それより深くは浸透していないこと」。その理由は、セシウムは土壌中の粘土成分に強く吸着して、容易にはがれにくい性質があるからだ。

「しかし」と菅野氏は言う。「表面から5cmといっても農地の表面は凸凹でし、その部分は特に豊かな肥沃な土ですから、剥ぎ取る土壌はできるだけ少なくしたいのです」と説明する。田尾理事長は、「どれぐらいの厚さの土壌を剥ぎ取るのか。それを知るために、土壌の深さ別に放射能の強さを知る必要があるのです」と話し、土壌を円柱状に深さ16cmまで取り出し、それを2cm単位の厚さでスライスして測定用のサンプルとしている。「除染実験を行う前に、

●ふくしま再生の会



- ①13日の活動をリードする再生の会メンバー。左から田尾陽一理事長、菅野宗夫福島事務所代表、小川唯史事務局長
- ②福島事務所として飯舘村の活動拠点の菅野宗夫宅。村内の佐須地区にあり、現在は避難指示解除準備区域に指定
- ③遠隔地にいるメンバーもスカイプで参加して、その日の活動内容を打ち合わせる

●放射線、放射能を測る



- ④移動の際は必ず線量計を携帯
- ⑤一時帰宅や村内の見守り隊で回っている時の呼吸で内部被ばくを測定するエアロゾル放射能測定機
- ⑥参加メンバーは携帯型の累積線量計を2日間、身に付けて活動。ちなみに2日間で10μシーベルト
- ⑦「共通の基準で信頼できる線量データを村民自身が測る」ために開発したGPS線量計
- ⑧データを蓄積したSDカードをPC経由でサーバーのデータベースに登録
- ⑨自宅を自分で除染した大久保さんはイネ・大豆・そばの試験栽培に協力参加

●土壌放射線量のサンプル採取



- ⑩土壌の垂直分布測定のためのサンプル採取
- ⑪クリアケースに採取した土壌は東大農学部で放射能を測定

必ずこの方法で土壌サンプルを採取し、除染後のサンプルと比較して除染効果を判断するのです」。

再生の会は現在、①詳細な放射線測定と放射線マップの作成、②家屋、農地、山林の除染実証実験、③医師らによる被災者のケア、④情報通信技術を活用した現状の発信などをプロジェクトとして活動している。

菅野氏は、「飯舘村の現状を見て、実際を知ってほしい。放射能の汚染は目に見えず、ニオイもなく、物理的な破壊はありません。その不思議な恐怖を感じてほしい」と、繰り返し何度も強調する。被害には現場があり、そこから解決策を見出すしかない、それは原発事故であっても同じだと教えてくれるのが飯舘村だ。